

## 私の大学時代ーバンドそして石油研

宇部地区合同同窓会 石崎 一雄（工化60年卒）



### バンド時代

私が山口大学に入学したのは昭和52年4月です。卒業は昭和60年3月で大学院に行ったわけではありませんが実に8年も在籍しました。

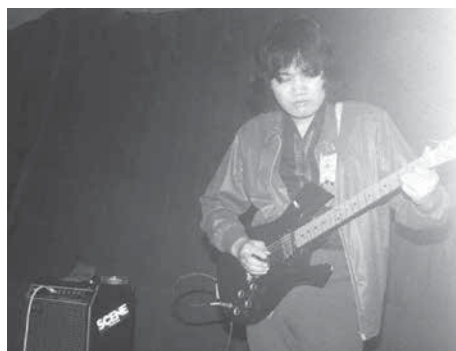
従って“私の4学年”はほかの方の4学年とは違い、一緒に過ごした人が多くいます。ただし学校にはあまり行かなかったので面識のない方も大勢いると思います。

当時、国立大学の入試は一期校、二期校に区分されていた時代でした。山口大学は二期校に属し、多くの人が一期校の受験に失敗し二期校に入学する時代でした。かく言う私もその一人で一期校である広島大学工学部を受験し見事に失敗しました。山口大学は志望校ではなく、乗り気がせず、東京の私立大学に行きたいと思っていました。ところが、実際入学してみると山口大学は大変いい環境ですばらしい大学だと思いました。

私は高校時代から音楽が好きでハードロックに心酔していました。高校時代には大学生になれば自由な時間ができ好きなだけ音楽活動ができるものだと思っていました。大学生は勉強するものだという事は少しも考えていなかったのですが、いざ大学生になってみると工学部の学生は必修科目が多くとてもそんな時間があるとは思えませんでした。

入学してまず探したのは音楽系のサークルでした。当時の山口大学には音楽系のサークルといえばフォークソングを主体としたサークル以外存在せず、どうしようかと思ってい

たところ掲示板に軽音楽同好会の結成会員募集を見つけ、すぐさま集会に参加し結成することになりました。約30人で始めた同好会でしたが現在でも軽音楽同好会は継続して活動を続けているようです。サークル活動に明け暮れ学校に行く暇もないほど下宿でギターの練習をし、学業は置き去りでした。ひどい時には年間数単位しかとれないという年もあり、音楽活動にますますのめり込んでいました。そのころ流行っていたのはフュージョン系の音楽で代表的なギタリストとしてラリー・カールトン、リー・リトナーなどが挙げられ、この人たちに追いつきたいと毎日12時間以上練習していました。



学生時代のコンサート

転機が訪れたのは6回生のとき、コカコーラ主催のフレッシュサウンズコンテストに出場した時でした。私の所属する「無人島」というバンドは、山口県大会を勝ち抜き中国大会に出場し、広島郵便貯金ホールで演奏をしました。このとき世間のバンドの実力を知ることになり、とても自分にはその才能があるとは思えないと考えるようになりました。また、一緒に活動していたバンド仲間も留年をやめ次々と卒業していきました。このような

日々から学業に戻して下さったのは元工学部長の梶返先生でした。私を研究室に呼び、なぜ学校に来ないのかと尋ね、明日から毎日自分の研究室に来るようにと言われました。そのころの私はすっかりさぼり癖がついており研究室に行かない日々が続きました。もともと研究が嫌いなわけではなくおもしろいと感じてはいたのですが学校に行くことがうまくできませんでした。すると先生は大学院生に私を呼びに来させ、研究室でいろいろ話をされ先生の研究の手伝いをするよう言われました。これがもう7回生の時です。最後のチャンスでこれを逃すと卒業はできないという時でした。

### 石油研究室

先生の教えもあって8回生でやっと4年生になれました。4年生になると研究室を決めないといけないのですが梶返研究室は人気が高く、くじ引きで土屋先生の石油研究室になりました。研究テーマはグラファイト-Cs層間化合物の触媒作用についてでした。層間化合物など初めて聞く化合物で大変興味を覚えました。アルカリ金属-グラファイト層間化合物はグラファイト層の間にアルカリ金属を取り込みアルカリ金属の付近に反応点を持つことで、化合物が狭い層間で反応するため、小さい化合物が選択的に生成し、触媒作用を持つというものでした。ただしアルカリ金属を使用しているため酸素に弱く空気中ではあっという間に燃え尽きてしまうものでした。大変おもしろい物質ですが実用性には欠けるものです。土屋先生は学生に自由に研究させ結果を報告するというスタイルでした。私はまた自由なことをいいことにさぼっていました。研究室で実験していると知らない間に後ろに先生が立っておられ「どこまで終わってる?」と聞かれてドキドキし冷や汗をかいたものです。今と違い石油研究室には既製品のガスク

ロマトグラフィーは数台で、多くの学生は手作りのガスクロマトグラフィーを使っています。自分もその一人で実験中の故障は自分で修理し、改良していました。おかげで基本原理は十分に理解でき就職後も大いに役立っています。

自分の実験では一旦始めると24時間以上かかるものが多く48時間というものもありました。研究室の仮眠用ベッドを占領しよく寝泊りしていました。土屋先生の指導は私のような学生にもよくわかり、ものの見方、考え方など、社会人となった後も部下の指導にも役立っています。



石油研究室のメンバー  
(後列右端が筆者、前列中央が土屋先生、  
後列左端が今村先生)

卒論発表では、土屋先生の層間化合物の理論を否定した持論を展開し工業化学科の先生方の失笑をいただきました。とんでもないことを言ったものだと後悔しています。

このように私は自由気ままな学生時代を送り、工学部では梶返先生、土屋先生、松田先生、小倉先生などに大変なご迷惑をかけました。定年の年になり、多くの部下たちの育成に関わり、改めて先生方のご苦勞が身に染みてわかりました。今でも、梶返先生、土屋先生には頭が上がらず大変感謝しております。先生方のご健勝をお祈りいたします。